

# 甲状腺機能低下症

## Hypothyroidism

甲状腺ホルモンの生産が不足しているか、体での甲状腺ホルモンの消費量が異常に多い場合、正常に必要な量の甲状腺ホルモンが不足します。この状態が甲状腺機能低下症と呼ばれ、甲状腺ホルモンが足りないことにより、さまざまな症状が発現します。この病気はほとんどすべての器官の代謝機能に影響を及ぼします。

一般に犬では4～6歳、中型～大型の種類に発症することが多いようで、トイ種や超小型犬種に発症することは稀です。また、猫でこの病気が自然発生的に見られることは非常に稀で、ほとんどは甲状腺機能亢進症の治療のために外科的甲状腺切除術を受けた猫に見られます。

### 原因

甲状腺機能低下症の原因には様々なものがありますが、大きく以下の3つに分けられます。

免疫異常、甲状腺炎、甲状腺萎縮などによる甲状腺機能障害を一次性甲状腺機能低下症と言います。犬の場合は95%がこの一次性甲状腺機能低下症です。次が、下垂体形成異常や破壊などによる二次性甲状腺機能低下症。そして視床下部と呼ばれる器官の異常による三次性甲状腺機能低下症の3つです。三次性甲状腺機能低下症は現時点では犬では確認されていません。

この他、甲状腺の先天的奇形、後天的な破壊、ヨード欠乏、甲状腺の外科的切除などによる原因もあります。

### 症状

甲状腺機能低下症では全身的に様々な症状が見られます。元気がなくなる、運動力の低下、よく眠る、寒さに弱くなる、毛質が変化する、脱毛(特に尾)する、よく皮膚の細菌感染をおこす、ふけが多いなどが主な症状です。

また、あまり食べていないのに太る、不整脈、角膜潰瘍や乾性角膜炎などの目の病気、下痢、便秘なども起こることがあります。

雌では、正常な発情をせず、不妊、死産、発情の欠如、などが見られる場合があります。また、雄では睾丸が萎縮したりすることもあります。

### 診断法

一般身体検査ならびに、血液検査、尿検査などを行います。確定診断には甲状腺ホルモンの定量検査を数回行ったり、甲状腺の機能試験を行います。

### 治療法

現在のところ二次的に発症していて一次疾患が治療できるもの以外、根治はできません。あくまでも対症療法を行います。具

体的には、不足している甲状腺ホルモンを毎日与えます。投与は終生必要です。

### 自宅での看護法

獣医師の指示にしたがいケアしてあげてください。お家でできることや注意すべきことはその病態により様々です。時には体温低下で寒がることがありますので、冬場は保温に注意してあげるといいでしょう。

### 予防法

遺伝的な可能性も示唆されておりますが、一般的には適切な予防方法はありせん。但し、去勢していない雄犬での発症率が高いという報告(注意:他の研究では去勢、避妊の有無による差はないともされています)がありますので、交配の予定がなければ去勢をすることはいくらか予防になるかも知れません。

### メモ

この病気は以前、元アメリカ大統領クリントン氏の飼犬が罹患している病気としても有名でした。

柴犬、ドーベルマン・ピンシャー、ゴールデン・レトリバー、シベリアン・ハスキー、シェットランド・シープドッグはこの病気の好発犬種とされています。また、ビーグル、ボルゾイのある家系では遺伝的に特定の甲状腺炎が起こることによる一次性甲状腺機能低下症が知られています。その他、アイリッシュ・セッター、ミニチュアシュナウザー、ダックスフント、コッカー・スパニエル、エアデール・テリアなども発症リスクが高いようです。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..